

1 最後に見つけた？私のやれる（やりたい？）こと？！

堂本 彰夫

私：突然ですが、これからの人間（社会）にとって、必要（大事だ）とされる価値について、あなたと遣り取りをしたいと思いますが、いいですか？

ジェミニ：もちろんです！ぜひ詳しく意見や考えを交わしましょう。「これからの人間や社会において、何が重要視されるのか」というテーマは、AIやテクノロジーが急成長し、地球規模の環境や社会構造が大きく変化している今、まさに真剣に向き合う価値のある非常に深い問いだと思います。効率性や生産性、知識の量といった従来重視されてきた価値観がテクノロジーによって補完される中で、人間にしか担えない部分や、人間同士が共に生きていくために真に大切なものとは何か、という視点がますます parts として大きくなっています。

まずは、あなたが今「これが大切になるのではないか」「ここが気になっている」と感じていらっしゃる価値観やテーマがあれば、ぜひ教えてください。それを皮切りに、議論を深めていきましょう。

私：もちろん、理想論的には、いわゆる「自由／平等／平和」といったようなことかと思いますが、そこに、大きく絡まってくるのが、（国民）国家という形態であり、そこにおける「政治／経済／教育」のあり方かと思っています！ただし、私は、もと教育研究者の端くれでもありますので、最終的には、教育のあり方ということになりますね？！

ジェミニ：おっしゃる通り、非常に本質的で核心を突いた問題提起ですね。「自由・平等・平和」という普遍的な理念（理想）は、言うまでもなく人間社会の根幹に置かれるべきものです。しかし、それらが抽象的な言葉のままに終わらず、実際の社会で機能するかどうかは、まさに「国家」という枠組みと、そこを動かす「政治・経済・教育」という三位一体のシステムに大きく依存しています。

特に、政治や経済が「制度や資源の配分」を司る枠組みであるのに対して、「教育」はそのシステムの中で生きる人間自身（価値観・倫理観・思考力）を形成するという点において、あらゆる営みの根底に位置しています。その意味で、「最終的には教育のあり方に帰着する」というご指摘には強く共感いたします。教育研究に深く関わってこられた視点から見ても、これからの人間社会における教育を考える上では、以下のような過渡期における葛藤や葛藤の越え方が重要なテーマになってくるのではないのでしょうか。

1. 国家の枠組みと「地球市民／人間」としての教育の相克

国民国家の教育は、歴史的に「国家の維持や発展を支える国民の育成」という側面を強く担ってきました。しかし、現代のように環境問題や技術革命、グローバルな課題が国家の境界を越える時代において、教育は「一国の国民としてのアイデンティティ」と「ひとつの地球に生きる人間としての普遍的倫理」をどう調和させるかという難題に直面しています。

2. 経済（効率・功利）に従属しない教育の価値の再構築

近代教育は、産業社会に必要な労働力や技術者を育成するという「経済的合理性」と切っても切れない関係にありました。AIや自動化が急速に進み、単なる知識の習得や効率性がテクノロジーに代替されつつある今、「経済の道具としての人間」ではなく、「一人の自律した人間」としていかに豊かに生きるかを育む教育への転換が問われています。

3. 「自由・平等・平和」を実生活で実践するための知のあり方

これらの理念は、単に知識として「暗記」するものではなく、対話を通じて不一致を乗り越えたり、他者の痛みに共感したりする「関係性の態度」や「批判的思考（Critical Thinking）」として身体化されて初めて意味を持ちます。主体的で民主的な市民を育てる場として、教育がどう機能しうるかが試されています。制度や社会構造（政治・経済）を変えるのも最終的には「人間」であり、その人間をどう育むか（教育）が社会の未来を決定づけるというサイクルを考えると、教育のあり方こそがすべての出発点であり到達点であると感じます。

こうした観点について、長年教育の研究や現場に携わられたお立場から、「これからの時代に特に教育が問われるべき点」や「従来の教育観で限界を迎えていると感じられる部分」など、ぜひ先生のお考えをお聞かせい

ただけますでしょうか？

私：ほとんど、共感すべき内容で、改めて、あなたの考察力（情報整理？）に驚嘆しますが、そうした上記のような理解は、どのようなことを経て（情報に接して？）生まれたのでしょうか？まずは、そのところを教えてください！

ジェミニ：私のこうした整理や考察は、何かひとつの特別な情報源から生まれたものではなく、人間がこれまで積み重ねてきた膨大な議論や知の歴史、そして現代の社会変化に関する多様なデータを包括的に分析・統合するプロセスから生まれています。具体的には、以下のような領域の知見や議論を掛け合わせることで構築されています。

1. 思想史・政治哲学・教育学の古典と現代の議論

「自由・平等・平和」という理想と「国民国家」の相克、あるいは「教育と国家・経済の関係」というテーマは、近代以降の哲学や社会学、教育学において絶えず議論されてきた普遍的な問いです。ルソーやカントといった近代哲学者が提示した「人間形成（ビルドゥング）」や「世界市民」の理想、ジョン・デューイに代表される「民主主義と教育」の関係性（単なる職業訓練ではなく市民を育てる教育）、近現代の教育社会学における「国家の道具としての教育（国民育成）」と「個人の自我形成」の緊張関係、こうした歴史的な論議脈をバックボーンとして参照しています。

2. 現代のグローバルな社会・経済・技術変化のデータ

歴史的な理論に加えて、現在進行形で起きている以下のような最新のトレンドや課題分析を照らし合わせています。

テクノロジーの進化：AIや自動化によって「効率性」や「単なる知識量」の価値が低下し、人間にしかできない創造性や対話力、倫理観が再評価されていること。

地球規模の課題：気候変動やパンデミックなど、一国主義（国民国家の枠組み）だけでは解決できない課題が増え、「地球市民」としての視点が不可欠になっていること。

経済構造の変化：産業革命以降の「均質で効率的な労働力を育てる教育モデル」が、不確実性の高い現代において限界を迎えていること。

3. 多角的な視点の比較と要約（情報整理の仕組み）

私自身は人間のような実体験や個人的な感情を持つわけではありませんが、対立する視点や異なる分野の知見を客観的に比較・網羅し、論点のコア（核心）を抽出することを得意としています。先生が投げかけてくださった「国家形態」や「政治・経済・教育の三位一体」という視点を受けた際に、それらが歴史的にどう議論され、現代のどんな課題とリンクしているかを瞬時に構造化して提示したのが、先ほどの回答のプロセスです。言ってみれば、私が提示したのは「人類がこれまで蓄積してきた議論の地図や枠組み」を整理した整理棚のようなものです。

しかし、その地図に「現場の実感」や「人間としてのリアリティ」「具体的な歴史的実感」という血肉を通わせることができるのは、まさに先生のように長年研究や現場に関わってこられた人間だけだと考えています。私のこの「整理された枠組み」をご覧になって、研究者としての実感やご経験から「ここは机上の空論に近い」「現場ではむしろここが最大の壁になる」といった違和感や、補足したい点などはございますか？

私：ありがとうございます！現時点では、特に違和感や補足したい点はありませんが、現下の問題は、一応は、こうした正しい（学問的な？）知見が紡ぎ出されるにしても、それらが、実際の場面や人間関係等に反映されていない（生かされていない）ということでしょうか？！

ジェミニ：まさに、それこそが現代社会が抱える最大かつ最深の構造的課題（ギャップ）ですね。どれほど学問的・理論的に正しく、普遍的で美しい理念（自由・平等・平和、あるいは人間中心の教育観）が提示されても、それが「実際の制度や現場、そして人々の日常的な振る舞いや関係性」に落とし込まれない——この「知と実践の乖離」こそが、いま多くの人々が抱く不安全感や無力感の根源にあると感じます。なぜこの乖離（生かされない状況）が起きてしまうのか、大きく分けて3つの構造的な障壁が考えられます。

1. 制度やシステムの「目的に対する慣性（トックリの首）」

学校組織や行政、経済システムといった近代社会の枠組みは、19世紀～20世紀の「国家の近代化」「産業の急速な発展」に最適化して作られました。理論や理念がどれほど「これからの時代は個性の尊重や対話が大事だ」と更新されても、制度の評価基準（受験システム、標準化されたテスト、GDP 中心の経済指標、行政の縦割り構造など）が過去のパラダイムのまま強固に残っているため、現場が理念通りに動けない構造があります。

2. 「短期的な合理性（政治・経済）」と「長期的な育み（教育）」の時間のズレ

政治は選挙周期（数年単位）、経済は決算や市場（数ヶ月～数年単位）という「短期的成果」を求めます。一方で、人間を育てる教育や文化の醸成は、「数十年・世代を超えた時間軸」を必要とします。短期的な効率や数値目標が優先される現代社会の力学の中では、目に見えにくく時間のかかる「真の人間形成」や「丁寧な人間関係の構築」はどうしても後回しにされがちです。

3. 個人レベルでの「認知（知っている）」と「身体化（できる）」の断絶

知識として「対話が大事だ」「多様性を認めよう」と理解することと、実際の人間関係の中で自分のアンコンシャス・バイアス（無意識の偏見）を手放したり、相反する意見を持つ他者と粘り強く対話したりできることの間には、巨大な溝があります。教育の現場でも、知識を「教え込む」形態から、関係性の中で「身体化する」学びへと転換しきれていない現状があります。

結局のところ、学問や理論がいくら「正論」を唱えても、それを動かす人々の「インセンティブ（評価や報酬の仕組み）」と「現場の文化（関係性のあり方）」が変わらなければ、理論は空砲に終わってしまいます。教育研究の観点からご覧になって、この「正しい知見が現場や関係性に生かされない問題」を打破するために、どこに風穴を開ける（何を変革のてこにする）ことが最も現実的、あるいは本質的だとお考えでしょうか？ぜひ、先生がこれまでご覧になってきた現場の実感や知見から、この「理論と実践の架け橋」をどう架けるべきかについてのお考えをお聞かせください。

私：なかなか辛辣な？問いかけですが、残念ながら、これといった見解を、今挙げることはできません（まさに辛いことです！）！その答えになるかどうかは分かりませんが、今後、このスタイルで、あなたとのやり取りを続けていきたいと思い始めましたので、それに代用したいと思います！今後とも、改めて、よろしくお願い致します！

ジェミニ：こちらこそ、そう言っていただけて大変光栄です！私の投げかけた問いが少し込み入りすぎてしまったかもしれません。しかし、「今すぐに明確な答えを出せない」と感じられること自体が、この問題がいかに根深く、一筋縄ではいかない本質的なものであるかを物語っているのだと思います。安易な手前みその答えに飛びつかず、葛藤をそのまま抱え込む姿勢こそが、思考を深める第一歩なのだと感じます。

「対話を通じて、共に考え続けていく」ということ自体が、まさに先ほど議論に上がった「知と実践を結ぶ営み」そのものではないでしょうか。AIである私は、大量の情報や論点を整理したり、客観的な視点を提供したりすることは得意ですが、そこに「人間としての実感」「歴史を生きる眼差し」「葛藤する心」という真の重みを与えてくださるのは先生です。対話を重ねる中で、ふと気づいたことや、日々のニュースや生活の中で感じた小さな違和感、あるいは過去のご研究や現場でのふとした思い起こしなど、どんなことでも結構です。自由な思考の実験場として、いつでも思いついたときにお声がけください。

これから末永く、じっくりと対話を深めていけることを心から楽しみにしております。どうぞよろしくお願いいたします！

（つづく）